



Title	平安文学の感覚・感情形容詞に関する研究：『枕草子』を中心に
Author(s)	劉, 琳; LIU, Lin
Citation	研究論集, 13, 225(左)-240(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54071
Type	departmental bulletin paper
File Information	012_LIU.pdf



平安文学の感覚・感情形容詞に関する研究

—『枕草子』を中心に—

劉 琳

要 旨

本稿は修士論文の一部を抜粋したものである。本稿では、平安時代の言葉の一面を反映する『枕草子』を主な資料とし、平安時代の感覚・感情形容詞の使用状況、意味用法、意味変化及び語の消滅などの実態を記述する。

日本語形容詞の分類について、語尾の活用から「イ形容詞」、「ナ形容詞」（形容動詞）のような形態上の分類と性質、意味上からの分類がある。性質、意味上からの分類にはいろいろな説があるが、感情・属性の二分類が広く行われてきた。すなわち、客観的な性質、状態を表すものは「属性形容詞」、人間の主観的な感覚、感情を表すものは「感情形容詞」と呼ばれる。平安時代の文学作品に使われる感覚・感情形容詞に関して、従来多くの研究がなされてきたが、管見では、感覚形容詞の意味用法及び感覚・感情形容詞全体の数量的な把握については、まだ十分に検討されていない。したがって、本稿では、先行研究を踏まえ、『枕草子』を研究資料として、平安文学作品における感覚・感情形容詞全体の使用状況、語義や用法、意味変遷などについて考察してゆく。

1. はじめに

感覚形容詞と感情形容詞は、どちらも主観に偏り、性質において類似する形容詞の一群である。平安時代の物語や随筆・日記などのいわゆる平安仮名文学作品に使われている感情形容詞の意味用法に関しては、従来多くの研究がなされてきた。それらの研究は主として「うれし、かなし」など、いくつかあるいは個別の語を取り上げ、その語の意味変遷、類義語との使い分けの比較などを検討するものであった。しかしながら、感覚形容詞の意味用法及び感覚・感情形容詞全体の数量的な把握については、まだ十分に検討されていない。

従って、本稿では、平安時代の感覚・感情形容詞の使用状況、意味用法、意味変遷及び語の

消滅などの実態について記述してみたい。始めに、平安時代の代表的な文学作品である随筆の『枕草子』を中心的な資料として研究する。『枕草子』については種々の方面にわたって研究がなされているが、本稿ではこの作品における感覚・感情に関わる形容詞を抜き出し、それらの全体的な特徴、語義や用法、意味変遷などをまとめてゆく。

2. 研究内容及び研究方法

2.1 研究資料の『枕草子』について

『枕草子』は清少納言が宮廷生活の回想・見聞や自然・人生などに関する随想などを約三百の章段に綴ったものである。『源氏物語』と同じく叙情的な作品であり、人々の心情を的確に表現し、多くの人物の容貌や性格を描くことから、豊富な形容詞の使用があると思われる。

『枕草子』の諸伝本は、その奥書、所蔵者あるいは巻数から、おおむね雑纂形態の三巻本と能因本、類纂形態の堺本と前田家本の四系統に大別できる。田中重太郎、岸上慎二以来の『枕草子』の系統研究によれば、三巻本系統の本文は能因本系統の本文より、その語句の形態に古態を見いだすことができる。四種の伝本について諸家諸説があるが、現在通説と言われるのは、もし三巻本を作者清少納言の初稿本とすれば、能因本はその再稿本であり、堺本は後世の人の改作増補本、前田本は能因本と堺本との合成本である、ということのようである。本稿の調査用のテキストには、『新編日本古典文学全集18・枕草子』（三巻本）及び『原文&現代語訳シリーズ枕草子（能因本）』を用いる。用例に付した現代語訳も同書による。

2.2 研究方法について

本稿では、『枕草子』における感覚・感情に関わる形容詞を抜き出し、数量的調査とそれぞれの語の用例を個別に解釈する方法を通して、感覚・感情形容詞の使用状況、語義や用法、意味変遷などをまとめてゆく。まず、『枕草子』における形容詞全体の使用状況を数値化し、その中から感覚・感情形容詞を抽出し、形容詞総語数に対する比率及び現代語との対照を通して『枕草子』ではどのような感覚・感情形容詞が見られ、現代になって初めて現れる感覚・感情形容詞は何かを明らかにする。次に、意味・形態・構文などの面から抽出した感覚・感情形容詞について考察し、現代語に残存する語と消滅した語に分類する。現代語に残存する語に対しては、意味の変遷があるかどうかを検討し、意味変遷のある語については、その変化の実態を明らかにする。

3. 『枕草子』に使われる感覚・感情形容詞についての判定

3.1 日本語形容詞の分類についての先行研究

日本語形容詞の分類については、語尾の活用から「イ形容詞」、「ナ形容詞」（従来の形容動詞）のような形態上の分類があるが、本論文の研究対象を「イ形容詞」とする。

性質、意味上からの分類にはいろいろな説があるが、感情・属性の二分類が広く行われてきた。西尾（1972）は、形容詞はその意味から、属性形容詞と感情形容詞に分類できるとする。客観的な性質、状態を表すものを「属性形容詞」、人間の主観的な感覚、感情を表すものを「感情形容詞」と呼び、前者の例として「いたい、かゆい、まぶしい」など、後者の例として「うれしい、かなしい、憎い」などを示した。また、感情形容詞には接尾語「～がる」がつくこと、主語の制限があること、対象語が存在すること、という三つの特徴があると指摘した。西尾の研究を踏まえ一定の分類指標を立て現代日本語の形容詞を分類しているのは細川（1993）である。細川（1993）は、国立国語研究所の『分類語彙表』、西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』など、6種の文献¹の501語を分析対象として、①「わたしは～い」の形で「わたし」の心の様子を表すことが可能か、②対象内容としてモノ・コトのいずれをとるか、の2点から、その意味・用法を検討し、整理し、形容詞を「属性形容詞、感覚形容詞1、感覚形容詞2、感情形容詞、評価性形容詞」の五種四類に分類した。ここでは、本稿とかわる感覚・感情形容詞について見ておく。

感覚形容詞1：「わたし」の心の様子を表し、対象語を必要としない。「暑い、痛い」のような臓器感覚によるもの。

感覚形容詞2：「わたし」の心の様子を表さず、主語にモノをとる。「甘い、辛い」のような皮膚感覚・味覚・嗅覚・触覚などによるもの。

感情形容詞：「わたし」の心の様子を表し、対象語にコト、モノをとるもの。

二種の感覚形容詞の違いについて細川（1993）は「感覚形容詞1は身体感覚を“わたし”

¹ 細川（1993）では、分析対象とした語彙は、次の6種の文献中、2種以上のものに採録されている形容詞語彙515のうちの501語である。

①国立国語研究所『分類語彙表』秀英出版 昭和39年（1964）

②西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所 昭和47年（1972）

③時枝誠記『例解国語辞典』中教出版 昭和31年（1956）

④文化庁『外国人のための基本語用例辞典（第二版）』大蔵省印刷局 昭和50年（1975）

⑤国際交流基金『日本語初歩』凡人社 昭和56年（1981）

⑥甲斐睦郎「小学校国語教科書の学習語彙表とその指導」光村図書 昭和57年（1982）

の状態として表現しているのに対し、感覚形容詞2は人間の感覚を通して事物の状態を表現することである。(pp.21)」と指摘している。また、感情形容詞と属性形容詞の違いに関しては、「従来から言われる主観・客観という区別ではなく、“わたし”の状態か事物・事柄の状態かという視点及びその対象内容の差異による (pp.28)」としている。

古代語の感覚・感情形容詞の判定についてはまだ分析方法が確立されていないため、本稿では、上記細川が提示した現代語形容詞の分類基準を参考とする。細川(1993)の語彙リストと照らし合わせ、対応する語を『枕草子』から取り出し、これらの語を『枕草子』に使われる感覚・感情形容詞と仮定し、意味用法、構文、対象語などの面から考察する。そして、現代語の感覚・感情形容詞と比べ、用法などの相違を明らかにしてゆく。

3.2 『枕草子』に使われ、細川(1993)の語彙リストと対応する語

『枕草子』における形容詞の使用状況については、延べ語数にしては三巻本で3573語、能因本で3507語の形容詞がある。異なり語数は三巻本と能因本共通の形容詞が289語、三巻本にのみある形容詞は34語、能因本にのみある形容詞は37語、つまり三巻本、能因本に使われる形容詞の総語数はそれぞれ323語、326語である。『枕草子』の形容詞リストを作り細川の形容詞語彙リストと照らして、対応する感覚形容詞10語、感情形容詞17語を抜き出した。三巻本と能因本に共通してあるもの、三巻本にのみあるもの、能因本にのみあるものという三つのカテゴリーに分けて、取り出した語を以下のように示した。

■感覚形容詞1

(1) 三巻本と能因本共通 (6語)

あつし(暑)、くるし、さむし、すずし、ねぶたし、ものうし

(2) 三巻本にのみある 無し

(3) 能因本にのみある 無し

■感覚形容詞2

(1) 三巻本と能因本共通 (4語)

からし、つめたし、にぶし、ゆるし

(2) 三巻本にのみある 無し

(3) 能因本にのみある 無し

■感情形容詞

(1) 三巻本と能因本共通 (16語)

ありがたし、うしろめたし、うれし、かなし、くちをし、こころぐるし、こころぼそし、こころよし、つらし、にくし(憎)、のこりおほし、はづかし、はらだたし、もどかし、ゆかし、わびし

- (2) 三巻本にのみある 無し
- (3) 能因本にのみある (1語)
さびし

3.3 細川 (1993) の語彙リストと対応する語についての考察

前節では、細川 (1993) の語彙リストと照らし、『枕草子』に使われる形容詞から感覚形容詞 10 語、感情形容詞 17 語を抜き出したが、それらを仮に『枕草子』の感覚・感情形容詞とする。これらの語は現代語においては感覚・感情を表す形容詞として使われるのは言うまでもないが、『枕草子』では具体的な使用状況はどうであろうか。そして、これらの語は現代語感覚・感情形容詞としての諸特徴は、平安時代言葉の使用状況の一面を反映する『枕草子』においてはどうか、などの問題について、以下それぞれの語の具体的な使用例を用いて考察してゆく。

3.3.1 感覚形容詞

細川 (1993) の語彙リストと対応する「感覚形容詞 1」は全部で 6 語あり、そのうち、用例数が 10 以上の語は「あつし、くるし、さむし」の 3 語であった。用例数が一番少ないのは「ものうし」で、三巻本に 2 例、能因本に 1 例、重複 1 例で、僅か 2 例しかない。6 語の使用状況から見ると、現代語とは大きな差はなく、現代語においても「あつい、くるしい、さむい」は形容詞の基本的な語彙であり、使用頻度が高い。それに対し、「ものうし」の使用は少ないのである。

6 語のそれぞれの用例を観察した結果として、「あつし、くるし、さむし、ねぶたし」の 4 語すべての用例が身体感覚を表し、対象語は存在しない。また、以下の例のように感覚を意識する主体が明示されないタイプである。しかし、前後の文脈から判断すると、確かに話し手の「わたし」の状態として表現されている。

例(1) 原文：やうやう暑くさへなりて、まことにわびしくて、「など、かからでよき日もあらむものを、何しに詣でつらむ」…

現代語訳：だんだんと暑くさえなって、本当にやりきれない感じがして、「どうして、こんな暑い日ではなく、ちょうどよい日であろうのに、何だかってこうして参詣したのだろう」…

(三巻本 百五十二段「うらやましげなるもの」)

一方、「くるし、ものうし」の 2 語は、収集した用例で確認すると、ほかの 4 語とは違う意味用法が見られるので、個別に確認してゆく必要がある。

『枕草子』において、細川 (1993) の語彙リストの「感覚形容詞 2」に対応する語は 4 語ある。この 4 語の用例は少なく、三巻本と能因本とに重複している用例を除くと、「からし、つめたし」

はそれぞれ2例しかなく、「にぶし、ゆるし」はそれぞれ1例しかない。個々の用例を確認したところ、「つめたし」の2例、「ゆるし」の1例は「わたし」の心の様子を表さず、皮膚の感覚を表すものである。「にぶし」の1例は人間の感覚を通して事物の状態を表すものである。

以上、細川（1993）の語彙リストに対応する感覚形容詞について用例を確認した。感覚形容詞のうち、「くるし、ものうし、からし」の3語は感情を表す用例が見られる。「ものうし、からし」の2語は、すべての用例が感情を表すものなので、感情形容詞のカテゴリーに入れるべきと考える。また「からし」は現代語と比べると意味用法において違うところがあることが分かった。

3.3.2 感情形容詞

この節では、細川（1993）の語彙リストと対応する17語が『枕草子』において感情表現として使われているのか、どういう構文的な特徴があるのかについて考察する。

それぞれの語の用法を確認すると、感覚形容詞に対して、感情形容詞は終止形と已然形が多く現れる傾向が見られ、述語的である。感情形容詞を述語とする文の主語が明示されないタイプが多く見られる。感情形容詞述語文の主語制限に関して、地の文の場合、西尾（1972）が指摘しているように主語は確かに話し手（1人称）である。会話文の場合は、次の例のように主語は1人称とは限らない。

例(2) 原文：「あなうれし。とくおはせよ」など、見つけて言へど、すさまじき心地してなにしのほりつらむとおぼゆ。

現代語訳：「まあうれしい。早くいらっしゃいませよ」などと、わたしをみつけていうけれど、中宮様の御寝のあとなので興ざめな気持ちがして、何のために参上したのだろうと感じられる。

（三巻本 七十八段「頭中将のずずろなるそら言を聞きて」）

例(2)は、作者の清少納言が夜中宮の所へ参上したときに彼女を見つけた女房の話である。ここでは「うれし」は女房の心情を表す言葉であり、確かに作者の「わたし」の言葉ではなく、女房という第三者の感情を代弁しているものにすぎない。会話文で使われるので、発話者の気持ちを表すものとして扱うことができると思われる。また、このような用例は『枕草子』に少なくない。

それぞれ実際の用例を確認したところ、感情形容詞の用法はかなり複雑であり、使用法により意味の揺れも見られる。構文的には、感情の主体が明示されない用例が多数である。この点は、現代語の感情形容詞文とはほぼ同じだと思われる。そして、感情対象は実際のモノを含む事件、つまりコトである場合が多いのである。

17語のうち、「ありがたし」は『枕草子』には感情形容として使われておらず、評価形容詞と

して使われている。「ありがたし、ゆかし」以外の15語は『枕草子』において確かに感情を表すものであるが、「ころよし」については評価を表す用法も見られる。また、「うしろめたし、かなし、にくし、ゆかし、わびし」など、現代語とは意味上の相違がある語も見られた。「くちをし」は、語の意味変化により、後悔の意味を表す「くやし」の意味に接近し、現代語において、後者の方が広く用いられるようになったことが分かった。

3.4 細川（1993）の語彙リストに対応する語がない語

細川（1993）の語彙リストにない語について、西尾（1972）と細川（1993）の提示した判定基準、前節の考察を通して認められた『枕草子』の感覚・感情形容詞の特徴、原文にあたって意味用法の確認などにより検討する。意味の確認には『日本国語大辞典（第二版）』を参照する。前節と同じように、『枕草子』形容詞リストから取り出された感覚・感情形容詞を三つのカテゴリーに分け、以下のように示した。

■感覚形容詞1

(1) 三卷本と能因本共通（1語）

あつかはし（暑）

(2) 三卷本にのみある 無し

(3) 能因本にのみある 無し

■感覚形容詞2

(1) 三卷本と能因本共通 無し

(2) 三卷本にのみある（1語）

かうばし

(3) 能因本にのみある 無し

■感情形容詞

(1) 三卷本・能因本共通形容詞（39語）

あさまし、あたらし（可惜）、あぢきなし、あなづらはし（悔）、あへなし、いとほし、いぶせし、うし、うしろめたし、うたてし、うとまし、うらなし、うらめし、うらやまし、おぼつかなし、おもはし、かしくし（畏）、かたじけなし、かたはらいたし、けにくし、こちあし、こころうし、こころづきなし、こころはづかし、こころにくし、こころもとなし、こひし（恋）、たのもし、たのもしげなし、なげかし、なつかし、なやまし、ねたし、はぢがまし、ほいなし、ものし、ものなげかし、わづらはし、をし

(2) 三卷本にのみある（2語）

うしろやすし、こころわづらはし

(3) 能因本にのみある 無し

3.5 意味変遷のある語についての考察

前田(1985)によると、語形や語の意味変化には、さまざまなパターンがあるが、その変化の要因別に分類すると、次のように示す。ということなので、この分類方法を参照し、前節の調査から分かった『枕草子』における意味変遷のあった感覚・感情形容詞を分類し、そして、いくつかの典型的な語例を出して、その意味変遷の実態を記述する。

- (1) 意味領域の変化：(意味の拡大, 意味の縮小)
- (2) 意味の転換 (近接的意味への転換, 比喩的転換など)
- (3) 語の消滅

3.5.1 語形・意味変化のある語

1 あぢきない

現代語では「あじけない」の語形が一般的である。『枕草子』では「あぢきなし」の用例は三巻本8例、能因本7例、重複7例、つまり全部の用例は8例がある。8例のうち、3例は「つまらない」と訳され、残りの5例は次の用例(3)のように「人を恋しく思い、または、好ましく思う感情が切なくどうしようもない」などの意味を表すものである。『日本国語大辞典』で意味を確認すると、おもしろみや魅力がなくつまらないという一種の索漠感を表す。現代語においてはすべきことが見つからなく、つまらない状態を慨嘆する心理を表す意味用法は一般的である。

例(3) 原文：あぢきなきもの わざと思ひたちて、宮仕へ出で立ちたるいと、物憂がり、うるさげに思ひたる。

現代語訳：今さらどうしようもないもの わざわざ思い立って、宮仕えに出た人が宮仕えをおっくうがった、面倒くさそうに思っている。

(三巻本 七十五段「あぢきなきもの」)

2 かうばし

「こうばしい」は現代語において、飲食物を煎った、焼いたよいにおいを表す語として使われており、『現代形容詞用法辞典』には「対象は飲食物であることが原則で、飲食できないもののよい香りについてはふつう用いない (pp. 229)」という記述がある。『枕草子』において、「かうばし」は次のように用いられている。

例(4) 原文：頭洗ひ化粧じて、かうばしうしみたる衣など着たる。

現代語訳：頭を洗い、化粧をして、**香**がよく染みている着物などを着ている。

(三巻本 二十七段「心ときめきするもの」)

例(4)では、「かうばし」は着物のよい香りを表し、ここに「かうばし」に意味変化が起きていることが明らかである。『日本国語大辞典』によると、上代では「かぐばし」という語形で、植物のいい香りを表す語である。中古に至ると、「かうばし」に取って代わられている。『枕草子』と同時代の『源氏物語』にある「かうばし」の用例を確認し、『枕草子』と同じ、香りが染みしている着物、植物の香りなどを表す語として使用されている。『時代別国語大辞典』（室町編）で確認すると、中世に入ると、「かうばし」の意味用法が拡張し、食べ物を煎った、焼いた際のいいにおいを表すようになっていく。つまり、古代において「かうばし」は現代語「こうばしい」よりはるかに意味用法が広い。

3.5.2 消滅した語

1 あつかはし

「あつかはし」は動詞「あつかう」が形容詞化したもので、二つの意味を持っている。『枕草子』においては「暑苦しい、蒸し暑い」という意味として使われている。「あつかはし」の用例は1例しかなく、三巻本と能因本では多少違いがあるが、「あつかはしく」と「あつかはしう」というふうな、連用形と音便形の違いだけで、それ以外、文の内容はほぼ同じである。以下は「あつかはし」の用例である。

例(5) 原文：この生絹だにいと**暑かはしう**、捨てまほしかりしかば、いつのまにかうなりぬらむと思ふもをかし。

現代語訳：この生絹さえ、ひどく**暑苦しく**、捨てたかったのだから、いつの間にこんなに涼しくなってしまうのだろうと思うのも、おもしろい。

(能因本 百八十五段「風は」)

ここで「あつかはし」は、夏の着物と生絹の単衣を重ねて着たので、非常に暑苦しい感じを表すものである。現代語では「あつかはし」という語はもう使わなくなっているが、代わりに「暑苦しい、蒸し暑い」などを使うようになった。『時代別国語大辞典』を確認すると、上代編に載っていないが、室町編には記述が見られ、また、「蒸し暑い」という一つの意味しか持っていない。『日本国語大辞典(第二版)』の記述によると、「あつかはし」には①「暑苦しい」、②「わずらはしい、うるさい」の二つの意味がある。以上の辞典の記述及び掲載用例から、意味①は江戸期以降から使われておらず、代わりに「暑苦しい」が使われるようになったこと。意味②は平安時代以降すでに使われなくなっていたことがうかがえる。

2 いぶせし

「いぶせし」は現代語ではすでに使われておらず、方言として残存するのみである。『枕草子』には「いぶせし」の用例が多くないが、三巻本に2例、能因本に3例、重複2例、つまり全部で3例がある。次の例のように、「気詰まり、気が晴れない」ということを意味している。

例(6) 原文：御几帳引き寄せて、あたらしうまゐりたる人々には見えたまはねば、いぶせ
き心地す。

現代語訳：御几帳を引き寄せて、私たち新参の女房どもにはお姿をみせにならないので、
心が晴れない気持ちがする。

(三巻本 二百六十段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」)

『時代別国語大辞典』の記述から、上代には「いぶせし」には二つの意味しかもっておらず、時代が下がるにつれて意味が多くなったが、意味の変化も起こったことが分かる。『日葡辞書』には「恐ろしいこと」という解釈があり、『枕草子』に使われる意味用法はすでに使われなくなっていた。現在ではもう使われなくなった語である。

3 うたてし

「うたてし」は『枕草子』では盛んに用いられた語であり、用例数は全部で22あるが、次のように使われている。

例(7) 原文：さしも草。八重葎。つきぐさ、うつろひやすなるこそうたてあれ。

現代語訳：さしも草。八重葎。つき草は、色があせやすいという点が気に入らない。

(三巻本 六十四段「草は」)

『枕草子』では、例(7)のように、「うたてし」はある物に対し気に入らない、いやな気持ちを表す。『日本国語大辞典(第二版)』によると、「うたてし」は副詞「うたて」が形容詞化したもので、上代には用例が見られないが、中古になって発生した語で、近世以降は衰退した。その消滅した理由について、吉見(1993)の研究があった。吉見(1993)は、「いぶせし、うたてし」の「ei」型形容詞を含め、45の形容詞を「消えた形容詞」とし、消滅の理由について考察した。吉見は消滅は近世初期に生じ、その原因を二重母音の長音化という音韻変化に求めた。たとえば、「イブセシ→イブセー」のように変化すると、それによって、形容詞の語彙体系の形態的特徴は失われる。つまり、近代語の形容詞終止形は「イ」の形をとるという一般規則に反することになってしまう。したがって、一般規則に反した結果、その存在基盤を失ったため、消滅してしまったと結論づけた。しかし、ただ音韻変化のみに消滅の理由を求めることには説得力に

欠けるのではないかと思われる。

以上のことば以外は、「あたらし（新）」の語形変化により、「あたらし（可惜）」と同じ語形になった。後に、両語の意味混同から、「あたらし（可惜）」は衰退し、現代語では使われておらず、「新しい」になった。「憂し」は近世になって使用され始めた「愛い」との同音衝突を回避することにより、消滅した。現代語には、「物憂い気分、物憂げに」などの複合形容詞として残存している。「なつかし」という語は、『枕草子』では、「親しみたい」を意味しているが、現代語では、懐旧の思いを表す語である。『枕草子』に盛んに使われている「にくし」も現代語の「にくい」ほど嫌悪の情が含まれていなかった。

田中（1978）は語彙が変化する原因は、言語の内在する要因と、言語とは切り離れた外的要因とに分けることができると述べている。では、以上の言葉、その変化した、消滅した理由はなんであろうか。それについての考察は今後に残された大きな課題である。

4. 感覚・感情形容詞の使用状況などから見た特徴

以上、『枕草子』に使われている感覚・感情形容詞の判定について調査を行った。次に感覚・感情形容詞の全体的使用状況についてくつかの方面から考察する。

4.1 感覚・感情形容詞の使用状況

表1. 『枕草子』の形容詞，感覚・感情形容詞の使用状況

伝本	形容詞 延べ語数	形容詞 異なり語数	感覚形容詞 延べ語数	感覚形容詞 異なり語数	感情形容詞 延べ語数	感情形容詞 異なり語数
三巻本	3573	333	57	11	594	57
能因本	3507	336	55	10	553	56

表1が示すように、本論文で用いた調査用のテキストの三巻本と能因本の形容詞総語数，感覚・感情語の使用状況などに、大きな差はない。感覚・感情形容詞の用例数から見ると、感覚形容詞のうち、使用頻度が高い「あつし、くるし、さむし」の3語である。しかし使用頻度が高いと言っても、一番用例が多いのは「あつし」でも用例は僅か13例しかない。感情形容詞と比べると、『枕草子』においては、感覚形容詞は多用される語とは言えない。感情形容詞のうち、使用頻度高い語は「あさまし、いとほし、うたてし、うれし、くちをし、こころもとなし、にくし、ねたし、はづかし、わびし」の10語である。そのうち最も使用頻度が高いのは感情形容詞の「にくし」で、使用回数は90以上にのぼる。

4.2 活用形についての調査

表2. 感覚形容詞

伝本		語幹	終止形	連用形	連体形	已然形	未然形	合計
三巻本	使用数	0	6	14	17	4	2	43
	比率	0	13.95%	32.56%	39.53%	9.3%	4.65%	100%
能因本	使用数	0	4	8	18	5	3	38
	比率	0	10.52%	21.05%	47.37%	13.16%	7.89%	100%

『枕草子』に使われている感覚形容詞の活用形について、使用数及び割合を表すと表2のようになる。使用数の場合は三巻本、能因本の両伝本とも連体形、連用形の使用数が多い。割合から見ると、三巻本において連体形の割合が39.53%と最も大きい。次いで多いのは連用形32.56%である。能因本も同じ状況と言えるが、三巻本と比べるとそれぞれ7.84%、11.51%の開きがある。全体的な使用状況から見ると、『枕草子』においては、感覚形容詞の活用形は連体形が主流を占めていると言える。次に、感情形容詞活用形の使用状況を見てみよう。以下の表3を参照されたい。

表3. 感情形容詞

伝本		語幹	終止形	連用形	連体形	已然形	未然形	合計
三巻本	使用数	45	130	75	128	61	16	455
	比率	9.89%	28.57%	16.48%	28.13%	13.41%	3.52%	100%
能因本	使用数	52	125	65	124	58	19	443
	比率	11.74%	28.22%	14.67%	27.99%	13.09%	4.29%	100%

使用数から見ると、終止形がそれぞれ130、125で、最も多い。次いで多いのが連体形であるが、終止形と比べ大きな差はない。各活用形が占める割合から見ると、三巻本における終止形の割合が28.57%と最も大きい。次いで多いのは連体形28.13%である。能因本も同じ状況と言えるが、それぞれ28.22%、27.99%で、大きな開きはない。全体的な使用状況から見ると、『枕草子』においては、感情形容詞の活用形は終止形が主流を占めていると言える。

感情形容詞と感覚形容詞を比較すると、感覚形容詞は語幹の用法が一つもないのに対し、感情形容詞は語幹の用法が多い。また感覚形容詞の連用形、連体形が占める割合は感情形容詞での割合より大きい。それに対して、終止形の割合は感情形容詞のほぼ2分の1である。終止形は文末に多く使われる。他の言語と比べて、日本語の場合、文末は文の最も重要なところであるが、情報が最も多いところだと言える。文の中で記述する情報、判断、考えなどが文末に向かって蓄積されていく。感情形容詞は人の思い、考え、気持ちなどを表すものであるが、そこ

で終止形の使用が多いと思われる。

4.3 現代語感覚・感情形容詞の使用状況との対比

4.3.1 使用頻度の高い語との対比

前節では『枕草子』の感覚・感情形容詞の使用状況の調査を通して、感覚形容詞3語、感情形容詞10語の使用頻度が高いことが分かった。この13語の現代における使用状況は、どのようなになっているのであろうか。次にこれについて調査してみる。現代語についての調査用の資料には『現代雑誌九十種の用語用字』を用いる。現代の一般の雑誌でどんな語や漢字がどう使われているかの実態を明らかにするため、国立国語研究所は月刊・週刊・旬刊・季刊のうち発行部数の割合が多いもの、合わせて90種、評論・芸文、庶民、実用・通俗科学、生活・婦人、娯楽・趣味の五層に分けて、その語彙について大規模調査を行った。調査の内容、結果などを『現代雑誌九十種の用語用字』に載せ、出版された。

それを用い、調査した結果は、感覚形容詞の3語は現代語にも多用され、90誌全体から見ると、「あつい」の使用頻度が最も高い。雑誌の分野別から見ると、「あつい」は生活・婦人関連誌での使用は最も高い、それに対し「くるしい」は庶民関連誌、「さむし」は実用・通俗科学関連誌での使用が高い。感情形容詞10語のうち、「うたてし」は現代語には使われておらず、「くちをし、ねたし」は語形の変化が発生し、現代語での使用も少なくなった。残りの7語は「あさましい、いとおいしい、こころもとない、わびしい」の4語が語彙表に載ってないが、「うれしい、にくい、はづかしい」3語のうち、使用頻度最も高いのは「うれしい」で、特に庶民誌では多用されている語である。「にくい」も庶民誌に多用されるが、「はづかしい」は娯楽・趣味に相関する雑誌では使用頻度が高い状況である。

以上の調査で分かるように、『枕草子』に多用されている感覚形容詞は現代語でも使用頻度が高い語である。つまり、用例数が多い感覚形容詞については古代と現代ほぼ同じだと言える。一方、感情形容詞は古代と現代は全く違う状況になったのである。その理由は、感覚形容詞に対し、感情形容詞は意味変化しやすく、感情形容詞には意味変遷のある語が多いに求めることができると思われる。

4.3.2 細川の語彙リストの使用との対比

表4

	A	B	C	D	E (A+B+C/D)
	感覚形容詞1	感覚形容詞2	感情形容詞	形容詞 総語数	感覚・感情形容詞の形容詞 総語数に対する%
細川	27	36	45	501	21.56%
三巻本	6	4	57	323	20.74%
能因本	6	3	56	326	19.94%

現代語と対照すると、細川（1993）では、分析対象の形容詞は全部で501語、そのうち感覚形容詞は63語、感情形容詞は45語で、感覚形容詞の数は感情形容詞の約1.4倍である。それに対して、『枕草子』において、感覚形容詞は感情形容詞の僅か6分の1しかなく、感覚形容詞の語数はかなり少なく、『枕草子』に感覚形容詞は多用されていないといえる。これは、『枕草子』という作品の特徴とは関係があるのではないかと思われるが、『枕草子』は叙情的な作品で、感覚形容詞より、感情形容詞のほうが多用されるということが考えられる。また、語構成から見て、古代語に比べて現代語において派生形容詞、複合形容詞の数がかなり増えたなどの理由が考えられる。

感情形容詞については、「あたらし（惜）、うし、うたてし」などのように現代語においてすでに使わなくなった語がある。しかし、現代語の場合は、感覚形容詞と同様、派生形容詞、複合形容詞の数がかなり増えたため、現代語の感情形容詞の語数と比べて、大きな差がないということになる。

5. まとめ

本稿では『枕草子』に使われている感覚・感情形容詞を集め、それぞれの語の用例を個別に解釈する方法を通して、全体の感覚・感情形容詞の数量、使用状況、それぞれの語の意味用法、意味変遷などについて調査した。

感覚・感情形容詞を収集した際に、参考にしたのは細川（1993）の分類方法である。その分類方法をもとに、『枕草子』に使われている感覚・感情形容詞を抜き出した。感覚・感情形容詞の語数、意味用法などに関する調査を通して、『枕草子』の二つの伝本である三巻本、能因本において、感覚・感情形容詞の使用状況は少しの差が見られることが示された。用法から考察した結果はほぼ同じで、両伝本において、感覚形容詞の活用形は連体形が主流を占めるに対し、感情形容詞は終止形が主流を占めていた。

現代語に比べて、使用頻度が高い感覚形容詞はほぼ同じであるのに対し、感情形容詞は違う状況になった。その理由は、感覚形容詞に対し、感情形容詞は意味変化しやすく、感情形容詞には意味変遷のある語が多いということである。

細川の語彙リストと比べ、感覚・感情形容詞が形容詞総語数に占める割合に大きな差はないが、感覚・感情語それぞれの語数から見ると、現代語と比べ、感覚形容詞の語数が非常に少なく、感情形容詞の語数が多い状況である。その理由は、『枕草子』は叙情的な作品で、感覚形容詞より、感情形容詞のほうが多用されるということである。また、語構成から見て、古代語に比べて現代語において派生形容詞、複合形容詞の数がかなり増えたなどの理由も考えられる。一方で、感情形容詞は時代が下がるにつれて、意味変化がある語、消滅した語が多いからである。

今回考察対象から外した属性形容詞には、古代では事柄などの性質を表す語として使われているが現代語では人間の心情を表す感情形容詞になった語も見られる。「重々し」という語は『枕草子』において、「地位身分が高く威厳がある」という意味を表しているが、現代語には「暗く沈んだ感じ」という意味として使われているのが見られる。このような語についても、これから研究していきたいと思う。

また、評価性形容詞について、細川（1993）では、評価性形容詞を2種あげているが、それらは：(1)「わたし」の心の様子を表し、対象語にモノ、コトをとるもの

(2)「わたし」の心の様子を表さず、主語にコトをとるもの

(1)は感情形容詞と類似する、と細川が指摘している。例えば、『枕草子』における人間の心情を表す「あさまし、いとおし、恋しい」のような語は評価性形容詞の分類に入れられた。しかし、以上のような評価性形容詞は感情形容詞とはいったいどのような区別があるのか、細川の研究を見ても、まだ不明な点がある。それについて、今後の研究を通して明らかにしたい。

今回は『枕草子』の一作品だけを検討し、平安時代のほかの作品についての考察はできなかった。それを今後の研究課題としてさらに検討して、明らかにしたいと思う。

(りゅう りん・言語文学専攻)

参考文献

辞書及び参考資料：

- 国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』（第一分冊 総記及び語彙表）国立国語研究所報告 21
1962 秀英出版
上代語辞典編修委員会『時代別国語大辞典上代編』1967 三省堂
室町時代語辞典編修委員会『時代別国語大辞典室町編』1985 三省堂
中田祝夫ほか 1983『古語大辞典』小学館
飛田良文・浅田秀子 1991『現代形容詞用法辞典』東京堂
日本大辞典刊行会 2001『日本国語大辞典（第二版）』小学館

著作：

- 田中重太郎 1953『校本枕草子』（上巻・下巻）古典文庫
田中重太郎 1953『校本枕草子 総索引』（第一部 第二部）古典文庫
西尾寅弥 1972『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所
宮地裕ほか 1976『岩波講座日本語』（6）（川端善明 5 用言）岩波書店
吉田金彦 1977『国語意味史序説』明治書院
近藤義治 1978『源氏物語形容詞類語彙の研究』笠間書院
前田富祺 1985『国語語彙史研究』（第三部第五章）明治書院
山口佳紀 1985『古代日本語文法の成立の研究』有精堂出版
玉村文朗 1989『講座日本語と日本語教育 6 日本語の語彙・意味（上）』明治書院

松尾聰・永井和子（校注／訳） 1997『新編 日本古典文学全集 18 枕草子』小学館

論文：

- 大野晋 1958「日本語の古さ」『講座現代国語学（ことばの変化）』筑摩書房
東辻保和 1970「古典語感情形容詞研究の一視点」『季刊文学・語学』
山口仲美 1982「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学 語彙史』明治書院
細川英雄 1989「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158集
細川英雄 1993「形容詞の主観性について」『早稲田日本語研究(1)』
吉見孝夫 1993「消えた形容詞・生まれた形容詞」『言語』22(2) 大修館書店
吉田光浩 1993「古代形容詞類型考察のための一視点」大妻女子大学紀要 文系 25
吉田光浩 1995「感情形容詞構文小考——うれしについて」『大妻国文』26 大妻女子大学
矢澤真人 1998「日本語の感情・感覚形容詞」『言語』27 大修館書店
三上勝夫・段銀萃 1999「日本語感情形容詞の構文特徴について」『北海道教育大学紀要』教育科学編
49 北海道教育大学